

そは、若き命ゆえ

岬水すみて 秋空翠杳^{みどりとは}し おもひありやなし 菊ただ白きかな

後藤三郎著『孤權^{こごん}』冒頭の詩である。読み進むにつれ、岬は国東地方、彼は京大哲学科を私と入れ違いの後輩。だから序文は共通の恩師木村素衛^{もとむり}教授がお書きになったのだ。

ルソン島で戦死。二十一歳。出征に臨み、「思いありや」と自問し、「なし」ときっぱり自答する。白菊のごとき「清いいのち」の語が、詩、歌、断章^{だんしょう}の中に目だつて出ている。序文で師は絶賛する。「深さのある詩。いい魂。私も清められ、勇気づけられ、私自身のうちの創造的なものに強く呼びかける」。

師は自分のベッドを空けて彼を泊まらせ、終夜語り合い、「大きな生命への合一^{ごういつ}」を説く。翌永訣の朝、覚悟はできていた。「この生命にだけは永遠^{しだが}に随ひ、窮究^{きゆうきゅう}の人間性と学の生命を信じ、私は自分に生き切れるだけ生きたい」と。

彼は哲学の学徒。詩はやや難解。哲学するとは自覚的存在であり続けること、だか

ら絶対孤独者。「孤權」のごとく。

かかる存在は必然的に絶対者の前に立つ。しかし、そこ哲学に留まる限り救いはない。深淵を前にして苦悩する。それが哲学の運命。清く美しい魂の稀有の若者、彼は苦悩の最中、その命を奪われた。「いのち激しく燃えむもすべなこの性は戦ひの世の生のかなしさ」——最後の歌である。

師もまたそれから一年余、信州で教育復興を講演中倒れる。五十二歳。

「底ひなく深き愛あり　ますらをよ　いのちの限り努めざらめやも」の師の歌碑がその信州の野にたたずんでいる。

(一九九五年十月二十六日)